

幼児の造形表現から中学校美術の授業までの版に表す経験 の系統性とその特徴

茂木克浩・亀井章央・井上昌樹

Phylogeneticity and characteristics of experience expressing in plates from infant artistic expression to junior high school art classes

Katsuhiko MOGI, Akihisa KAMEI, Masaki INOUE

Abstract The experience expressed in plates is continuously incorporated from early childhood education to art classes in junior high schools. Therefore, it can be said that it is an activity that is easy to tackle with systematicity. This time, we investigated how to treat the experience represented in the plates at each stage of early childhood education, elementary school, and junior high school. Instruction books and textbooks were used for the survey. As a result, in early childhood education, we were able to find a technical system that develops from the experience of directly copying the shape and feel of materials to the experience of intentionally creating and photographing original plates. In elementary and junior high schools, guidance is provided based on the developmental stage. Among them, "woodblock prints" are frequently featured. It was understood that a lot of those subjects were subjects in the field of "Painting", and the aspect of the reproduction technology that "plates" had and the information transmission by them was not paid much attention. It was also found that it was assumed that all processes were carried out by one person.

Keywords: *Experience expressing in plates, Phylogenetic, Infant artistic expression, Primary education, Secondary education*

はじめに

本研究を志すきっかけは指導者としての筆者らの経験にある。かつて筆者らは小学校 4 年生の児童を対象に、下絵を制作し彫るのではなく、まず彫る工程を行いその彫り跡から表現を見出させる木版画題材を実践したことがある。その活動の中で、子どもたちの中に自然発生的にトライアル・アンド・エラーが生じる場面に遭遇した。活動中に児童たちは、「彫刻刀の前に手をおくと怪我をする」や「彫ったところには色が付かない」、「摺ったら左右反転したからやり直そう」、「摺った後にも直すことができる」など、子どもたち同士のコミュニケーションの中で自然と木版画の特性に気づくことができていた。

それまで当たり前のように子どもたちに木版画の特性を伝えていた筆者らにとって、それらに彼ら自

身で気づいた姿は大きな衝撃であった。またそれと同時に、私たち自身一人で黙々と制作するのが版画であり、それを当たり前だと思っていたことにも気付かされた。この経験をきっかけとし教育現場における「版に表す経験」について再考する必要性を感じ本研究をスタートさせた。

1. 研究の目的

「版に表す経験」と聞くと、彫刻刀を用いて版木に溝を彫り、その板の表面にインクを塗り、さらにその面に用紙を重ね上からこすすることで、その凹凸を写し取る活動、小学校や中学校の授業の中で行った「(木)版画」を思い出す人も多いのではないだろうか。実際、版画の授業は昭和 33 年版の小学校学習指導要領の中に「版画」という言葉で明記されてか

ら現在に至るまで、学習指導要領内での表記の仕方に変化はあるものの、小学校の図画工作科、中学校の美術科の授業において長く取り組まれてきた現状がある。

版に表す経験を学習指導要領では「同じものを何枚も写し取ることができる、反転して写る、版ならではの表現効果があるなどの特徴をもった造形活動のことである。例えば、身近なものを版に利用して型を押ししたり、凹凸のあるものを選んでこすり出したり、紙版や簡単な木版で表したりすることなどが考えられる。型紙を切り取ってその内側や切り取ったものの外側をスポンジやローラーのような用具で着色するなど版に表す経験の一つと考えることができる。」¹⁾と説明している。この定義にのっとれば、版に表す経験＝版画ではなく、多様な表現方法を含むことがわかる。そのように考えると、版に表す経験は、小学校だけでなくその前段階にある就学前施設(幼稚園・保育園・認定こども園)においても多様な実践がなされていると考えられる。

このように校種を選ばず実践されている版に表す経験は、幼小中の連携という視点で見ればその系統性、学びの連続性が捉えやすい題材であり、それは子どもたちにとって経験を通して学んだことが、意識する、しないに関わらず、次の制作に生かしやすい状況にあるとも言える。

また幼児から中学生まで幅広く取り組まれているということは、各発達段階に応じて幅広く難易度が設定できる活動だと言える。

以上をふまえ本論考では、各校種段階において版に表す経験が具体的にどのように扱われているのかを調査し、現在の教育現場での扱われ方とそこにみえる課題を明らかにする。またその結果を元に、今後の版に表す経験のあり方について言及する。

2. 研究方法

就学前施設、小学校、中学校において、版に表す経験がどのように実践されているのかを明らかにするために、保育者養成校で使用されている教科書や小・中学校の検定教科書の内容を調査する。調査では、取り上げられている活動の内容や参考作品の特徴を、版形式、版種、絵画彫刻分野とデザイン工芸分野のどちらで扱われているのか等の視点から分類する。なお校種によって分析の視点に含まれていな

い項目もある。

3. 版に表す経験とは

ここでは、版に表すということについて、歴史的な視点から考察していく。

そもそも「版」とは印刷を行うための用具を指す言葉である。版にインクを塗りそこに紙等を重ね摺ることで、版の上の情報を複製(印刷)していく。つまり版とは、複製によって情報を保存・伝達するという実用性をもって生み出された技術と言える。

日本においてはそのような複製技術としての版から実用性が取り除かれ、純粋美術の表現技法に用いられたことによって、版に表す表現の代表ともいえる版画が生み出された。版画とは「版を介して制作する創造的な美術作品である」²⁾「さまざまな素材に、絵の具やインクの付くところと付かないところを作り、それを紙に転写して制作する絵画方式」³⁾と定義される。

この美術作品あるいはそれを生み出すための技法としての版画という言葉が遣われだしたのは、明治30年代のことである。その中でも特に重要な作品として、明治37年(1904年)『明星』に綴じ込まれた山本鼎の『漁夫』が挙げられ、日本においてはこの作品の発表をもって美術表現としての版画が出発したとも言われている⁴⁾。山本は、浮世絵制作等に代表されるような絵師、彫師、摺師による分業印刷の方法ではなく、「自画、自刻、自摺」の理念を提唱した。この山本の理念を土台として「創作版画」が広く普及していくことになる。このように見えてくると日本美術史において版画という言葉や美術作品としての表現方法は、近代に生み出され比較的歴史の浅いものであることがわかる。

また山本は表現者として版画を芸術表現に位置づけただけでなく、教育者としての一面をもっていた。山本はそれまでの学校教育で主流とされていた臨画中心の美術教育から、自由画教育論を提唱しその普及に尽力した。山本の作家としての取り組みと教育者としての取り組みの2つが重なり合い、現在の学校教育で行われている版画へと続いていくことが想像できる。

その一方で版を複製技術として見た時、その歴史は非常に長い。何をもって複製と定義するのかは意見がわかれるところかもしれないが、「かたちをうつ

表1 幼児教育における版に表す経験の一覧

技術的系統性	技法・種類	素材（用具）	特性	備考
① 写すことの理解	手形・足形押し、スタンプング（凸版）	身体、空き箱や野菜の断面、木片やプラスチックの蓋など、身の回りの様々なもの、絵の具、紙	複数	日常生活での版への意識（手形、足形）
	デカルコマニー（平版）	絵の具、紙、アクリル板など	唯一	フィンガーペインティングからの展開としても考えられる。 偶発的な現れから見立てによる活動の展開可能性。
	墨流し・マーブリング（平版）	墨汁、版画用インクを灯油で薄めたもの、市販のマーブリング用絵の具、水、紙、紙コップ、布など	唯一	偶発的な現れから見立てによる活動の展開可能性。
	擦り出し・フロッタージュ（凸版）	木の皮や葉、壁など凹凸のあるもの、色鉛筆、クレヨン、薄紙、パット	複数	生活環境の手触りへの意識。
	ストリングデザイン（糸引き版画）（凸版）	毛糸や風糸など、紙、絵の具	唯一	偶発的な現れから見立てによる活動の展開可能性。
② 版への着色行為	ステンシル（孔版）	タンポ、ローラー、絵の具（版画用インク）、紙、葉、毛糸、網、マスキングテープなど	複数	
	ローラー版画（凸版）	ローラー、絵の具（版画用インク）、毛糸や風糸など	—	
③ 原版の意図的操作	スチレン版画（凸版）	スチレンボード（あるいは食品トレイ）、ニードルやカッターナイフなど先の尖ったもの、絵の具（版画用インク）	複数	
	粘土版画（凸版）	粘土、紙、絵の具	複数	粘土遊びからの展開
④ 先を読みながらの 創意工夫	紙版画（凸版）	紙、絵の具（版画用インク）、ローラー、ハサミ	複数	
	コラグラフ（凸版）	布、木の葉などさまざまな材料、紙、絵の具（版画用インク）、ローラー、ハサミ	複数	

す」と定義すれば、その嚆矢は紀元前に見られる。印刷技術は紙の発明と共に大きく花開くが、それ以前にも封泥や陶文と呼ばれ印章が作られ活用されていたことがわかっている。また工芸的な分野に目を向けると、版が染色技法として利用されてきた歴史がある。

さらに時代を遡ると、アルゼンチンにあるクエバ・デ・ラス・manosの壁画⁵⁾に見られる手型の表現に代表される原始的な表現を見ることができる。これは自らの手を壁面に置き、その上から塗料を吹きかけて形を残したと推測されている。この壁画では版を自ら生み出しているわけではないが、自らの身体の一部を版の様にすることで、壁面にその形を正確に写し取ることに成功している。現在は美術作品として扱われている浮世絵も本来は印刷物としての扱いが強かったものと考えられる。

以上のことから版を用いて表現するというのは、近代以降に広まった純粋表現としての美術的な側面と人類の長い歴史の中で生み出され活用されてきた複製技術としての側面の両面をもっていることがわかる。

4. 各教育現場での現状

(1) 幼児教育における版表現

幼児にとって版に表す経験とは版遊びといえる。それは生活の中で自然に行われていることが多い。例えば、粘土遊びをしている時、泥のついた手を何気なく粘土板に押し当てる。そこについて手形を見て、手形を押す活動に夢中になっていく。これは自分の身体を版にした、スタンプ遊びのスタートと言える。また幼児の版画では、紙版画のために切り抜かれた紙の一方がステンシルの型になったり、ローラー遊びのパレットがモノプリントの版になったりするなど、子どもが自ら新しい版画の技法を発見していくこともある。

幼児教育では「環境を通して行う教育」が基本とされており⁶⁾就学前施設においてどのような版表現が展開されているかを特定して把握することは難しい。そこで本稿では、保育者養成校でテキストとしても使用されている著書『幼児造形の基礎 乳幼児の造形表現と造形教材』（樋口編著、2018）に記載されている版表現に関する項目⁷⁾から、幼児を対象に展開される版表現の各種技法と、そこで扱われる素材や用具、印刷特性⁸⁾、それらの技術的系統性を抽出し表1のように整理した。

当書の中で采筆は、版画や写し遊びにおける面白さの本質を「写すことの発見、驚き」にあるとし、絵の具やインクがのった原版に紙を押し当て、そっ

とはがす瞬間のドキドキ・ワクワク感が子どもの意欲を引き出すとしている⁹⁾。一方で、原版を作成して写す表現にはある程度の技術が求められることから、子どもの発達段階に加えて、技術面でも系統立てて取り入れていくことが重要であるとしている¹⁰⁾。

具体的には、デカルコマニーやスタンプング、マーブリングなどの経験を通して写すことの理解を深めることに始まる。これらの技法の多くは必ずしも版表現の特性である複数性¹¹⁾に依らず、1枚の版で1枚の絵しか摺ることのできないモノタイプ(モノプリント)が含まれていることが特徴的であり、その偶発的な現れから見立て遊びへと展開させることもできる。一方で、スタンプングやフロッタージュでは同じ形を複数表すことができることから構成遊びへの展開も考えられる。また、それらの技法は身近にあるあらゆる素材を版にすることから、物の形や表面の手触りなどに対して意識を向けるきっかけにもなりうる。

次に版への着色工程でローラーを使用し、ステンシルやスタンプ表現を経験する。ローラーはいわば回転する版であり、ローラーに絵の具のついた毛糸を巻きつけることで、ローラーの軌跡に合わせて毛糸の模様を連続的に転写することができる。また、型紙の上をローラーで着色することでステンシル(孔版)の経験も可能となる。

その後、原版を意図的に操作することのできるスチレン版画や粘土版画へと発展させ、最後に原版づくりを創意工夫し、作品に大きな変化をもたらす紙版画やコラグラフへとつなげる。これらは、紙に写したときに図案が左右反転することや、一つ一つの工程に時間がかかることなどから、ある程度先を見通すことのできる思考の働きが必要となる。こうした経験は、子どもが写る喜びや楽しみを味わいながら、知的好奇心や、創意工夫する力を育む上で有効であるといえる。

以上、幼児教育における版に表す経験の中には、素材の形や手触りを直接的に写す経験から、意図的に原版をつくり出して写す経験へと展開していくような技術的系統性を見出すことができる。対象となる幼児の発達段階を十分に考慮し、実践することで、感性的な育ちだけでなく、知的な育ちをも支える重要な教育実践となりうるだろう。

(2) 小学校図画工作における版表現

版に表す経験について、小学校学習指導要領では「内容の取り扱い」として次のように記されている。

「(7)学年の「A 表現」の(1)のイ及び(2)のイについては、児童や学校の実態に応じて、児童が工夫して楽しめる程度の版に表す経験や焼成する経験ができるようにすること。」¹²⁾

これは特定の版画技法を経験することについての記述ではなく、児童に多様な材料を体験させる観点から示されたものである。学習指導要領解説には具体例として「身近なものを版に利用して型を押したり」(＝スタンプング)、「凹凸のあるものを選んでこすり出したり」(＝フロッタージュ)、「紙版や簡単な木版で表したり」(＝紙版画、木版画)、「型紙を切り取ってその内側や切り取ったものの外側をスポンジやローラーのような用具で着色する」(＝ステンシル)ことなども版に表す経験の一つとして挙げられている¹³⁾。

図画工作科の教科書¹⁴⁾では版に表す経験について表2のように題材化されている。いずれの教科書も、低学年において版の「写す」行為に着目した表現として、スタンプングやフロッタージュ、ローラー表現などを造形遊びとして取り入れている。これらは直感的で具体的な版に表す経験であり、低学年児童の認知発達¹⁵⁾や幼小接続への配慮が読み取れる。また、それら写す行為によって偶発的に現れた形や色などから発想を広げ、自分なりのイメージをもって表現する(絵に表す)活動への展開も見られる。

中学年になると原版を意図的に制作して表す活動となり、その導入体験として紙版画やコラグラフなどによる表現題材が掲載されている。さらに中学年では、学習指導要領の「材料や用具の扱い」で「小刀」の使用が示されている¹⁶⁾ことから、彫刻刀を使用した木版画の題材へと繋がっていく。それまでの版に表す経験と比べ、版を制作する段階、特に児童にとっては慣れない用具である彫刻刀で版木にイメージを彫ることに多くの時間を費やすことになる。木版画は下絵を描き、それを彫るという段階を踏むため、画用紙に直接描いて表す表現と異なり、児童の表したいイメージをその通りに表現することには難しさがあると言える。その上、ある程度先を見通しながら計画的に活動を進める必要があるため、中学年の児童にとっては技能だけでなく思考力の側面においても難易度の高い題材である。そのため技術指導の比重が大きくなりがちである。その結果制作に対するモチベーションが低下し、表現への興味が増幅する感覚を体験できない児童の姿が見られることになる。¹⁷⁾

表2 小学校における版に表す経験の一覧

開隆堂出版

学年	題材名	技法・種類	材料・用具	内容・領域
1・2年上	クレヨンやパスとなかよし	フロッタージュ（凸版）	クレヨン、パス、画用紙 など	造形遊び
1・2年上	スタンプ、スタンプ！	スタンプ（凸版）	共同絵の具、大きな紙、身近な材料 など	造形遊び
1・2年下	いっぱいうつして	ステンシル（孔版）	版画用具、共同絵の具、画用紙、透明シート、はさみ、新聞紙、タオル など	絵に表す
3・4年上	でこぼこさん大集合	コラグラフ（凸版）	身近な材料、厚紙、はさみ、接着剤、版画用紙、版画用具、ばれん、版画インク、新聞紙 など	絵に表す
3・4年下	ほって表す不思議な花	木版画（凸版）	版画インク、版画用紙、版木、版画用具、ばれん、彫刻刀、すべり止め、新聞紙など	絵に表す
5・6年上	形を集めて	スタンプ（凸版）	鉛筆、色鉛筆、カラーペン、版画インク、画用紙、版画用紙、消しゴム、版画用具、彫刻刀、ばれん など	絵に表す
5・6年上	進め！ローラー大ぼうけん	ローラー（凸版）	共同絵の具、絵の具、ひも、梱包材、画用紙、ローラー、練り板、はさみ など	絵に表す
5・6年上	色を重ねて広がる形	木版画（彫り進み版画、回転版画、凸版）	版画インク、版画用紙、版木、版画用具、彫刻刀、ばれん、すべり止め、新聞紙 など	絵に表す
5・6年下	ひびき合う形と色を求めて	スチレン版画（凸版）	版画インク、版画用紙、版画用具、カッターナイフ、カッターマット、ばれん、スチレンボード、版に傷をつける身近な用具など	絵に表す

日本文教出版

学年	題材名	技法・種類	材料・用具	内容・領域
1・2年上	べったん コロコロ	スタンプ、ローラー（凸版）	木片、片面波段ボール、緩衝材、洗濯ばさみ、紙筒、ペットボトルキャップ、プリンカップなど版になる材料、タオル、共用の絵の具、模造紙・ロール紙、ローラー、スポンジ、トレイ など	造形遊び
1・2年上	うつした かたちから 【選択】 えのぐを つけた かたちから こすりだした かたちから	スタンプ、フロッタージュ（凸版）	絵の具を付けて写すことができそうな身近な材料、画用紙、コピー用紙、色画用紙、段ボール、共用の絵の具、スポンジローラー、トレイ、クレヨン・パス、コンテ・パステル、ペン、色鉛筆、はさみ、のり など	絵に表す
1・2年下	たのしく うつして 【選択】 かたがみをつかって かみはんで スチロールはんで	ステンシル（孔版） 紙版画、スチロール版画（凸版）	新聞紙、画用紙、共用の絵の具、カッターナイフ、カッターマット、スポンジローラー、クレヨン・パス、木工用接着剤、はさみ、型押し用具（キャップ類、フォーク、クリップ、テープや紙芯、ボタン、空き容器）、新聞紙、スチレンボード など	絵に表す
3・4年上	いろいろ うつして	コラグラフ（凸版）	版画用紙、版画用具一式、画用紙、片面波段ボール、木工用接着剤、クレヨン・パス、水彩用具一式、はさみ、のり など	絵に表す
3・4年下	絵の具でゆめもよう	デカルコマニー、マーブリング（平版）*モダンテクニックの一例として掲載	画用紙、ボール紙、段ボール、片面波段ボール、マーブリングセット、ローラー、ビー玉、トレイ、水彩用具一式、はさみ、のり など	絵に表す
3・4年下	ほって すって 見つけて	木版画（凸版）	版木、版画用紙、版画用具一式、トレーシングペーパー、彫刻刀、ペン、新聞紙 など	絵に表す
5・6年上	ほり進めて 刷り重ねて	木版画（凸版、彫り進み木版）	版木、刷り紙、版画用具一式、下絵用の紙、トレーシングペーパー、彫刻刀、筆記用具、新聞紙 など	絵に表す
5・6年下	版で広がる わたしの思い	木版画（凸版、回転版画、彫り進み木版）	版木・ゴム板・スチロール板、版画用具一式、版画用紙、色画用紙、彫刻刀、水彩用具一式、新聞紙 など	絵に表す

高学年では継続して木版画題材が掲載されており、「彫り進み木版」や「回転版画」など木版表現の拡張性が提示されている。このように中学年から継続して木版画が掲載されている背景として、いくつかの理由が推察される。

一つ目に彫刻刀を扱う木版画は、一学年だけの限られた時間内で自分なりの表現まで到達するのは困難であり、木版画として児童が自分なりに表したいものを表すためには継続的な経験が必要不可欠であ

ることが考えられるからである¹⁸⁾。

二つ目に木版画は凹版や孔版など他の版形式と比べるとプレス機のような特別な機材を必要とせず、比較的安価で取り組みやすい表現形式だと言える。そのため、図画工作科の授業時数が一層少なくなる高学年においては、新たな表現に出会うのではなく、それまでの木版表現を習熟させ、一人ひとりの表現を深めていくことが焦点化されるのではないかと考えられる。

三つ目に挙げられるのは、木版画題材に取り組むためにはある程度の計画性が必要になることが挙げられる。木版画も版に表す経験の特徴である偶発的な効果を活かしながら制作が展開される。しかし、児童が「材料や用具を活用し、表し方などを工夫して、創造的につくったり表したり」¹⁹⁾、「創造的に発想や構想をしたり」²⁰⁾ するためには、それだけでは学習が成立しない。彫刻刀という用具で彫り進めていくため、その扱いに慣れるだけでなく、先を見通して活動を進めることができる抽象的な思考力を発揮させる必要もある。以上のような理由から、木版画は高学年の発達段階に相応しい学習内容であると言えるだろう。

そもそも木版画という表現手法は、小学校図画工作科の限られた授業時数の中で完全に習得できるほど容易なものではなく、自分なりの表現として習熟させるためには相応の時間と経験が必要であると言える。また、そのような技法だからといって技術指導に偏ることは、子どもの意欲や主体性を発揮する機会を阻む危険性を孕む。この2点について理解したうえで、木版画題材を実践する必要がある。

(3) 中学校美術における版表現

中学校学習指導要領（美術）では版画に関する直接的な記述は見られないが、表3に示したように美術の教科書²¹⁾の中には版画関連題材の掲載を確認することができる。木版画や紙版画、コラグラフ、スチレン版画など、小学校での既習の表現手法も取り上げられ絵や彫刻などに表現する（生徒自身の思いや願いの表現）題材として掲載されている。このよ

うな主題の置き方は小学校図画工作科でのそれと同様である。一方で構成した模様やマークを、ゴム版を用いて布にプリントする表現題材が見られる。それは複製技術としての版画の性質に焦点が当てられ題材化されたものであり、構成や装飾といったデザインや工芸として表現する題材内容であることがわかる。このように、主題の所在が自己から他者へと移行している点が中学校美術科における版画表現題材の特徴として挙げられる。

また、フロッタージュやデカルコマニーなど版づくりを必要としない直接的な版表現についても学習する機会が見られる。光村図書『美術1』に掲載されている「さまざまな技法で描く」は、材料や用具を生かして表現の幅を広げる技能に関する資料である。思春期の生徒に対して絵に表すことの抵抗を減らすために必要に応じて指導に活用されるものである。

また版画技法に関して言えば、ドライポイントのように小学校では体験してこなかった凹版を経験する機会もある。凹版は版の凹部に詰められたインクをプレス機の圧力で紙に写しとる技法であり、代表的なものとして銅版画が挙げられる。学校にプレス機がないと実現できないことや、プレス機を使った摺りの段階で順番待ちの時間がかかることなど、実践にはクリアしなくてはならない課題がいくつか挙げられるが、多様な表現を体験するという意味では大変貴重な学びの機会である。

一方で、鑑賞の活動においても版画作品が取り上げられている。日本の伝統的版画表現として代表的な浮世絵がその鑑賞対象となっている。そこでは

表3 中学校における版に表す経験の一覧

光村図書

学年	題材名	技法	素材	分野（絵画表現・彫刻表現・デザイン用途）	その他
美術1	写してあわす版画の魅力	凸版(木版・紙版)・コラグラフ	木・紙・スチレンボード・水彩絵具・クレヨンなど	絵や彫刻など・表現	単色木版の作り方
美術1	文様・飾りの小宇宙	凸版(消しゴム版)	消しゴム・綿	デザインや工芸など・表現	
美術1	さまざまな技法で描く	フロッタージュ・デカルコマニー・マブリング		資料	
美術1	木でつくる(木を彫る)	木版	木	資料	
美術2・3	浮世絵から学ぶ江戸の職人技	凸版(多版多色木版・一版多色)	木・紙・アクリル	絵や彫刻など・表現	一般多色木版の作り方
美術2・3	北と南の風土から	紅型(染色)	木綿・紙	デザインや工芸など・鑑賞	

日本文芸出版

学年	題材名	技法	素材	分野（絵画表現・彫刻表現・デザイン用途）	その他
美術1	刷って出会う美しさ	凸版(木版・スチレン版画・ドライポイント・ステンシル)	木・紙・スチレンボード・コンテなど	絵や彫刻など・表現	凸・凹・孔・平版の仕組み解説
美術1	美しい構成と装飾	凸版(消しゴム版)	消しゴム・てぬぐい	デザインや工芸など・表現	
美術1	記憶に残るシンボルマーク	凸版(消しゴム版)	消しゴム・紙	デザインや工芸など・表現	
美術1	木版画	凸版(木版)	木	資料	
美術2・3上	東へ西へ	浮世絵(凸版・多版多色木版)		絵や彫刻など・鑑賞	和紙(原寸大2作品)
美術2・3上	手作りを味わう喜び	孔版(型染)	紙・布・紗・藍	デザインや工芸など・表現	
美術2・3下	生活を彩る染める味わい	スタンプ・ステンシル	絵具・染料・布	デザインや工芸など・表現	

「日本と西洋の美術や文化が影響し合っていることや、相違や共通性に気付き、美術文化を継承し創造することの意義を理解すること」²²⁾が目的とされている。浮世絵はそれまで児童が体験してきた自己表現としての作品ではなく、複製技術としての版画の特性に着目した表現であり、複数の職人が分業制でそれぞれの工程を高度な技術によって制作している。そのような複製技術として、あるいは当時の情報メディアとしての版画のあり方について学ぶ機会でもあるだろう。

5. 考察

以上が版に表す体験についてその系統性を調査した結果である。版に表す経験は、幼児の造形遊びから初等教育の図画工作、中等教育の美術まで広く実践されている表現題材であることがわかった。以下に、版に表す経験の幼・小・中に渡る系統性について整理し、実践上の課題について明らかにする。

幼児教育では子どもの発達段階を考慮した題材配置を検討することで、ものの凹凸を直接的に写す経験から始まり、原版を意図的につくって写す経験へと発展する技術的な系統性を見出すことができる。また素材との関わりや表現技法を楽しみながら経験することに焦点が当てられていることもわかる。そして全員が同一のテーマで制作するような活動より「版を押す」という行為自体に学びを見出すような活動が非常に多いことがわかる。幼児教育では「遊び」が生活の中心にある。幼児期の子どもたちにとっては作品をつくるという意識は低く、あくまで版を作って／使って遊ぶことで、版に表す経験の魅力を味わっていくのである。だからといって彼らが生み出したものが無価値なのではない。幼児教育における他の制作物と同じようにそこで生み出されたたくさんの方の表出の証は、保護者や保育者がその魅力を受け止めることによって表現となり、かけがえのない作品となるのである。

また小学校低学年における題材配置にも同様の系統性は見られ、幼少接続の配慮がうかがえるとともに、写す行為による偶発的な現れから見立てによる想像力を働かせて絵に表す活動など、発想・構想の能力を働かせるような題材へと展開していることもわかる。さらに中学年から小刀の扱いが学習指導要領上必須となっており、版に表す題材においても

彫刻刀を取り入れた木版画題材が多く実践される。木版画は紙に直接描くのと違い、下絵の作成、彫る、摺るという工程をもつ。また彫刻刀という使い慣れない道具を用いるため習熟には時間と経験を要する。そのため高学年においても継続的に版に表す題材として扱われていると考えられる。また木版画はその工程の複雑さから計画性が求められ、抽象的な思考力を働かせる必然性がある点からも、高学年向きの題材であると言える。いずれの題材も、子どもの思いや願いを表現する手段として版に表す経験が扱われている。ここからも創作版画が、小学校での版に表す経験の土台にあることがわかる。

中学校では小学校で扱われてきた創作版画としての意味合いに加え、構成や装飾など作品の用途や機能性といった他者を想定した造形表現(デザインや工芸)として扱われている点が特徴として挙げられる。複製技術としての版画の性質(複数性)や美術文化的背景に焦点が当てられており、主題の所在が自己から他者へと移行している点が中学校美術科における版画題材の特徴であるといえる。

以上の系統性は、子どもの発達段階が十分に考慮され、技術的にも思考力育成の観点からも相応しい題材配置であることがわかる。版画は明治末期に巻き起こった創作版画運動以降、実用的な印刷とは一線を画し、ファインアート寄りの平面視覚芸術、つまり絵画を目指す方向で定着してきたという経緯がある²³⁾。そこに明治期以降の児童中心主義的教育観(創造主義美術教育)が加わり、今日まで続く一人一点を制作するという前提が生まれた。現在の小学校中学年以降の木版画もこの文脈をしっかりと受け継いでいるといえる。

また教科書における浮世絵の扱いからも、創作版画の影響が根強いことがわかる。創作版画以前の版を用いた表現の代表である浮世絵は、木版を用いながらも複数の職人による分業制によって制作されていた。そもそも浮世絵は当時の情報メディアの一種であり、複製技術として木版画が用いられていたことがわかる。しかしそのような浮世絵も教科書の中では、絵や彫刻に表す活動に分類され純粋美術として位置づけられており、本来の浮世絵がもっていた複製技術として要素には比重が置かれていないのである。

高浜が西洋やアジア諸国、あるいは他の地域においても同様に、広く情報伝達の手段として用いられてきた²⁴⁾というように、世界的にも版を用いた表現

そのものには、情報伝達という側面があったことがわかる。このことから、学校における木版画題材は社会的、文化的観点から学校独自の活動であることがわかる。

6. まとめと今後の展望

本研究では、日本における版画の歴史と技法についてまとめ、版に表す経験というものの定義をし、各教育課程で版に表す経験がどのように扱われているのか、その系統性と特徴を整理した。

版を用いることは、長い人類の歴史の中で情報の複製という実用的な技術として発展してきた。その一方で写真技術や情報メディアの発展と共に、純粹美術の表現形式として実用性を取り払った版画が生み出され現在まで広く普及するに至った。今回の調査によって現在の学校教育における版に表す経験では、その純粹美術としての側面がクローズアップされており、複製(印刷)による情報伝達的手段として扱われてきた側面にはあまり目が向けられていないことがわかった。それはつまり、情報伝達を目的とした複製技術としての側面に焦点をあてることで、新しい版に表す経験のあり方を示すことができるということでもある。

また本研究によってこれまで版画は一人で制作するものとしてきた暗黙の了解を一度見直すことの必要性を感じるに至った。教科書に複数掲載されている浮世絵は、絵師、彫師、摺師による分業によって生み出されてきた。この浮世絵の制作工程にみられる特徴からは、山本が提唱した「自画、自刻、自摺」という表現方法とは異なる、「分業によって、一つの作品を皆でつくりあげる」という要素を見いだせる。教科書には浮世絵の制作工程等は紹介されているものの、それを実際の制作活動に取り入れている実践をあまり目にする機会はない。浮世絵の制作工程から学び、その要素を取り入れることで、協働的な学びの実践としての新しい版画題材の可能性が見えてくる。

以上を踏まえ、今後は本論稿において明らかになったことを取り入れた新たな題材開発を行い、実践を通して新しい版に表す経験のあり方を提示していきたいと考えている。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 図画工作編』, 日本文教出版, 2018, p.120
- 2) 遠藤竜太「版画概論」武蔵野美術大学油彩学科版画研究室+武蔵野美術大学通信教育課程研究室 編『新版 版画』武蔵野美術大学出版局, 2012, p.8
- 3) 黒崎彰『世界版画全史』阿部出版, 2018, p.12
- 4) まだこの頃には「版画」という言葉は使われておらず、山本の作品は同誌に評を寄せた石井柏亭によって「刀画」と名付けられていた。その後1905年『平坦』の山本が寄せた文章以降から「版画」という言葉が見られるようになる。
- 5) アルゼンチンのサンタクルス州にある洞窟に残された手の型群。古いもので9000年前に描かれたとされている。
- 6) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館, 2018, pp.28-32
- 7) 新實広記「9. 版画①-版の種類や用具の使い方」樋口一成 編著『幼児造形の基礎 乳幼児の造形表現と造形教材』萌文書林, 2018, pp.68-69; 采翠真澄「10. 版画②-版や写し遊びの技法のダイジェスト」同書 pp.70-71; 桂川成美「22. 版に表す-紙版画の特徴を活かした共同制作「海の生き物」同書 pp.148-149; 藤田雅也「23. スタンプ遊びの実践」同書 pp.150-151; 藤田雅也「24. ステンシル&ローラー遊び」同書 pp.152-153; 松田ほなみ「25. スチレン版画の実践」同書 pp.154-155
- 8) ここでは、一つの版で写すことが可能な枚数を、複数か(複数性)一枚のみか(唯一性)で分類し、その特性を版画の「印刷特性」とした。
- 9) 前掲 新實
- 10) 同上
- 11) 印刷技術としても用いられる版表現は、一つの版で同じイメージを複数枚写しとることができる。この性質を本項では「複数性」と定義する。一方で、デカルコマニーやマーブリングのように、一つの版から同じイメージを一枚だけ写しとることができる性質を「唯一性」と定義する。
- 12) 文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 図画工作編』, 日本文教出版, 2018, p.120
- 13) 同上
- 14) 現行学習指導要領に対応した図画工作の教科書を発行している日本文教出版、開隆堂出版の2社の教科書から版表現に関する題材を調査した。

- 15) Piaget .J, 1972, *L'épistémologie génétique*. Presses Universitaires de France. (滝沢武久(訳), 1972, 『発生的認識論』白水社)
- 16) 文部科学省 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 図画工作編』, 日本文教出版, 2018, pp.117-120
- 17) 湊七雄・牧野浩之 「小学校図画工作科における体系的な版画教材の研究開発—福井大学・福井県教育研究所の取り組み—」 福井大学初等教育研究 2015 第 1 号, 2015, pp.89-96
- 18) 楠見孝 「第 2 章 実践知の獲得 熟達化のメカニズム」 金井壽宏・楠見孝 編著 『実践知 エキスパートの知性』 有斐閣, 2012, pp.33-57
- 19) 文部科学省 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 図画工作編』, 日本文教出版, 2018,p.81
- 20) 同上
- 21) 現行学習指導要領に対応した図画工作の教科書を発行している日本文教出版、光村図書出版の 2 社の教科書から版表現に関する題材を調査した。
- 22) 日本文教出版 web サイト中学校美術「(令和 3 年度使用) 平成 28 年度版 題材内容資料 (評価規準例) 美術 2・3 上 学びの深まり」 https://www.nichibun-g.co.jp/textbooks/c-bi/download/r3/r3_h28cbi_23jo_daizai.pdf(2021 年 2 月閲覧)
- 23) 高浜利也 「版画教育の現場から」 『教育美術』 公益社団法人教育美術振興会, 第 82 巻第 1 号 (2021 年 1 月号) , 2021, p.12-15
- 24) 同上

